

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2023」 入 賞 作 品

# 目次

## ★優秀賞

岡山大学大学院 社会文化科学研究科 日本・アジア文化専攻 2年	高野かずみ.. 2
山口県立大学 国際文化学部国際文化学科 4年	前田 瑞季.. 3
八重山商工高校 3年	前原 恵龍.. 4
ANA WINGS 株式会社 客室乗務室	玉尾 由季.. 5
狛江第六小学校	真野 朝子.. 6
兵庫教育大学 学校教育研究科修士課程人間発達教育専攻 教育コミュニケーションコース 2年	嶋田 智沙恵... 8
ウミトロン株式会社	村上 千賀子... 9
九州大学 芸術工学府修士 2年	長谷川 愛... 10
立命館大学 文学部人文学科 4年	望月 泉 ..... 11
大阪医専 高度看護保健学科 1年	白方 晏 ..... 12

## ★入賞

同志社女子大学 表象文化学部英語英文学科 1年	田中 玲名 ... 14
広島県教育委員会 広島県立広高等学校	柏村 淑美... 15
京都産業大学 外国語学部アジア言語学科 4年	浅野 りつる.. 16
九州大学大学院 農学研究院 特別研究員 PD	高井 優生... 17
横浜国立大学 経済学部経済学科 1年	倉持 和輝... 18
獨協大学 国際教養学部言語文化学科	岡田 好加... 19
株式会社 EP ファーマライン	小松 由依 ... 20
共立女子大学 国際学部国際学科 4年	安藤 比奈... 21
昭和女子大学 国際学部国際学科	佐藤 優夢... 22
獨協大学 国際教養学部・言語文化学科・1年	金場ノエル... 23

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2023」

## ★優秀賞

### 無知と知の果てに

岡山大学大学院  
社会文化科学研究科 日本・アジア文化専攻 2年  
高野かずみ

2019年、私は語学研修で吉林大学へ赴いていた。日差しの強い9月18日、朝一番に授業を受けていた私の耳にサイレンの音が響いた。柳条湖事件だ。教科書で見た白黒写真と「勿忘国耻」の四文字がにわかに脳裏に浮かぶ。さて当日の夜、研修仲間が高铁に乗り観光へ行ったとのことで写真を共有していた。その行き先は「哈尔滨」……。現地の人々は「やけに」冷ややかだったという。そう、日本の若者は太平洋戦争を知っていても「抗日戦争」を知らない――

卒論に向けて、私は15年戦争期に海軍志願兵として出征した曾祖叔父の戦歴を調べていた。彼の履歴書に廈門、三竈島への上陸記録があったために凶らずも旧日本軍の「南支作戦」を調査することとなる。そのときに初めて、日本人が触れることのない暗い歴史が頭をもたげてきたのだ。中国側の資料や先行研究を集め、華南各地の被害状況や抗戦の展開を紙面に読むたび、日本では表面化しない歴史の側面――「侵略者」としての日本像に気付かされた。

私は四海兄弟という言葉が好きだった。地理的、文化的にも近い中国人には親近感を覚え、いわゆる中国人に対する悪印象というものを抱いていなかった。しかし同時に、日本人と中国人の間に密かに横たわる「過去の戦争」という溝を知らなかった。この認識の「かなめ」が欠如している限り、いかに自身が友好的だろうと真の交誼には発展しないのだ。彼らの目には、この「かなめ」を知らぬまま手放しに平和と友好を夢想していた私はどのように映ることか。「無知な日本人」、その一言に尽きる。近年日本では近代戦争史を「見たくない」人々がいるという。自国の後ろ暗い歴史を直視することは憚られるからか。戦争の風化が叫ばれる現代日本では、「侵略者」の側面は依然影を潜めている。

今年は中日平和友好条約締結45周年とのことだ。中国動漫や漢服、パンダ熱などが日本でも報道され、両国の草の根的交流は益々活発化している。他方で政治においては軍事・安全保障面での対立がみられる。関東軍の新映像が公開されたことは記憶に新しい。このひずみの根底にあるのはやはり例の「かなめ」で、政治問題だけでなく一般人の対日・対中感情にも波及している。思うに日本人は「中国を知らなさすぎる」。漢詩や古典小説といった人口に膾炙した要素だけでは到底計り知れまい。特に近代以降の中日関係を考える際には、侵略と抗日の歴史という「かなめ」に学ばねばならない。現在の対日感情が過去の戦争を通してどのように形成されたか、それを礎に将来中日がどのように関係を構築していくのか。両国の政治・経済・文化の発展を思えばこそ、特に日本の若者は改めて歴史を省みるべきだろう。無知が知に変わるとき、中日の関係はまた一步前進するのだ。

この時勢になってから、しばしば中国渡航に思いを馳せる。百聞は一見に如かず、伝聞でしか知らなかった中国に直に触れたのは何年も前のことだ。神経質な私にとって、中国での生活はまさにパラダイム・シフトとなった。当時まだ若く、繊細ゆえに悩みがちだった私の心は、大らかで気丈な中国人と接しているうちに融かされていった。あのときの大陸的な、したたかながらも優しい空気で包み込んでくれた中国を忘れられない。再び赴く日を夢見て、私はここ岡山で日々研究に勤しんでいる。

わが校はかの郭沫若も留学していたと聞く。そのためか中国人留学生がまことに多い。一步教室に入ればあたかも中国の大学に留学しているかのような気分になる。まさに中国語のシャワーだ。日本人の同期生がいない私にとって、浚漉とした彼らに囲まれて研究することはこの上なく楽しい。中国人の卓越した積極思考は周りをも明るくする。飽くなき向上心で切磋琢磨を促し、落ち込んだ時には屈託のない笑顔で励ましてくれる。接するほどに新たな発見をもたらしてくれる、私はそんな中国人を愛してやまない。

## ひとりぼっちじゃないよ

山口県立大学  
国際文化学部国際文化学科4年  
前田 瑞季

17歳の冬、生まれて初めて北京を訪れた。万里の長城に立って、ツンとした涼しい風を全身で浴びた感覚を、今でも昨日のこのように覚えている。滞在中に経験したこと全てが新鮮で、魅力的に見えたのだ。この時、私は中国に恋をした。

帰国後も頻繁に中国料理を食べたり、川劇の変面を動画で見たりするようになった。日本にいながら中国という国を身近に感じるのが当たり前になっていた。

しかし私は徐々に、中国が好きという気持ちを隠すようになった。生きづらさを感じるようになったからだ。日本には中国に対して否定的な層が一定数存在している。程度は違えど、私の身近な人たちも例外ではなかった。中国語の歌を聴いているだけで嫌な顔をされることもあった。中国に対して好意的なことを言えば、耳を塞ぎたくなるような意見が倍になって返ってくる。彼らの多くは「何となく」中国に良いイメージを持ってないと言っていたが、この「何となく」で私の心は何度も傷ついてきたのだ。

ある日、父親とテレビを観ていた時に中国に関するニュースが流れてきた。すると父親が私に「お前は中国が好きか」と聞いてきた。父親は以前から中国に対してあまり良いイメージを持っていなかったから、とっさに私は「別に興味ない」と答えてしまった。言い争いをしたくなかったから、私は逃げたのだ。その後自室に戻ると私は泣いていた。父親に対しても自分自身に対しても嘘をついてしまったからだ。悔しい、悲しい、辛い。色々な感情が駆け巡った。

なぜ日本には中国に対して偏見の目を向ける人が多いのか。在日中国人や中国が好きなのが肩身の狭い思いをしなければならないのか。その原因は多くの日本人の中国観が曖昧な形にとどまってしまっていることではないかと考えた。メディアで見る中国は一つの側面に過ぎないからこそ、他の手段で中国を多角的に知らなければならない。それならば私はその手段の一つになろうと決心した。

まずは中国が好きという気持ちを隠すことをやめた。そして独学で中国語の世界へ飛び

込んだ。家族からは否定も肯定もされなかったが、応援されているとは言えなかった。しかし私に諦めるという選択肢はなかった。中国語に苦手意識を持たないために、自分に合った方法を模索した。焦らずに毎日必ず中国語に触れることを心がけた。

日に日に高まる向上心を抑えることができなくなり、四川大学のオンライン留学に参加することにした。勢いよく申し込みをしたものの、入学式の直前まで不安に押しつぶされそうだった。

しかし過剰な心配とは裏腹に、私が進んだ先は優しい光で溢れていた。中国語の授業で分からないことがあっても、先生たちは熱心に教えてくださった。同じ間違いをしても、根気強く支えてくださった。クラスメイトたちは中国に対して偏見を持っておらず、彼らと過ごす時間は、私が私らしく生きることを肯定してくれた。孤独だと思っていた私にとって心強い仲間ができたのだ。そんな充実した私の初めての中国への留学は、名残惜しいほどあっという間に最終日をむかえた。

オンライン留学を終えた翌日は私の誕生日だった。そんなめでたい日に、先生から卒業試験でクラスの一位になったという連絡があった。その結果を両親は笑顔で喜んでくれ、応援すると言ってくれた。私の中国に対する決心を認めてくれたのだ。この時、私の頬を雫が伝っていく感覚があった。自室でひとりぼっちで泣いていた時とは違う、喜びの涙だった。

この作文を書いている最中、また日中関係が緊迫してきた。心がざわつかないと言えど嘘になるが、私はもう一人じゃない。オンライン留学での経験や支え合える仲間、そして両親の理解のおかげで、私は私らしく胸を張って生きていけるのだ。だからもしも今の状況に心を痛めている人がいるならば、私はそんな人の仲間になりたい。

## 贈り物

八重山商工高校 3年  
前原 恵龍

「沖縄県って中国とこんなにもつながっているのか」私がこの感情を持ち始めたのは中学3年生の時であった。この頃の私は、沖縄の独自の文化に疑問を持っていた。例えば、ちんすこうやサーターアンダギーなどの沖縄独自のお菓子、また組踊や三線などの芸能など、私に「なぜ、この文化が生まれたのだろうか」と疑問と好奇心を湧かしてくれた。この気持ちが大きく、沖縄の文化などが学べる、高校に進学を決めた。

沖縄は昔、琉球王国という王国であり、約500年という歴史をもっていたとされている。けれど、薩摩藩の琉球侵攻により、今の沖縄の形に徐々に変化をしていった。そんな500年という歴史の中で私の住む沖縄に中国は多くの贈り物を残してくれた。

琉球には古琉球時代と言われる時代があった。中国では、中華を文化の中心とし、周辺の人々を未開の民族とする、いわゆる中華思想が存在していた。琉球はその影響も受けつつ、中国を宗主国として、日本と中国などの文化を取り入れて独自の文化を築いていった。琉球の王は、中国の皇帝から承認されて初めて国王と名乗ることが許されており、冊封使という、使者が中国から琉球に何度か派遣されてきた。そんな、冊封使をもてなす為組踊という琉球舞踊が玉城朝薫氏によって作られた。彼は若い頃、日本芸能の美しさに魅了され、大和芸能の能や狂言・歌舞伎からヒントをえて、音楽や舞踊を琉球版にアレンジし

た。その功績は、「執心鐘入」、「二童敵打」など多くの名作を誕生させた。彼は、琉球という小さな国を中国という大国に認めさせたいという、威厳と権威を持ち合わせていたのだろう。それを感じさせる逸話がある。組踊の上演前に「踊りが物を言うことがあるか」とあざ笑った人でさえ、感動のあまり涙をしたということだ。今、組踊は1972年に日本無形文化遺産に2010年にユネスコ無形文化遺産に登録された。その美しさは、時代を越えて現代の私たちに感動を与えてくれる。また、沖縄の代名詞とも言える「シーサー」にも魅力が隠されている。シーサーの歴史はエジプトのオリエント文明までさかのぼり、シルクロードを通じ、獅子として中国まで伝わり、シーサーとして琉球に伝わった。シーサーはペア同士であり、雌は口が閉じており、福を逃さないという意味が込められ、雄は口が開き、邪気などを払うという意味が込められている。中国の獅子、沖縄のシーサー、両方とも意味がとても似ている。そして、獅子文化と同じ時期に学問や思想など伝わり、琉球文化が大きく発展した。

その他にも、サーターアンダギーは中国から調理技術を学んだ料理人によって作られちんすこうは日本と中国の菓子技術を参考にして作られた。音楽では、三線が中国から琉球に伝わり、三味線という名前に変わり日本に伝わった。琉球には「万国津梁の鐘」という鐘がある。そこには、「琉球国は南の海の良いところにあり、中国と日本の間にある蓬莱の島で、船で万国の津梁、いわば架け橋となって貿易を行い、国に宝物が満ちている」と記されている。日本と中国の架け橋であった琉球の姿があったのだ。

世界の国々の文化は広い輪でつながっている。その多くの文化は直接的では無くても、さまざまな道筋を経て、国から国に伝わり、発展し合ってきた。時には、考え方の違いや政治的な理由などで文化が受け入れなかった、背景も歴史を振り返ると存在する。けれど、その摩擦や受容から生まれる文化は素晴らしく、私たちに魅了し、後世に伝えたいという使命感を湧かしてくれる。相手の文化を知りたい、その感情は私たちに文化の美しさを教え、続けてくれる。

## あの味をもう一度

ANA WINGS 株式会社  
客室乗務室  
玉尾 由季

鯉って食べられるんだなあ…夕食に中国人ツアー客のみんなと大きな鯉を分け合いながら考えていた。ふと時計を見ると午後6時過ぎ。私の学生寮の門限は22時。間に合わない気がして急に焦り始めた。

私は大学1年生の夏休み、中国に行ってみたいと思い選んだのが天津理工大学の夏休みの3週間中国語プログラムだった。中国はもちろん天津に行くのも初めてだった。

中国に到着して6日目、最初の土曜日。私はひとりで天津から北京まで、高速列車で小旅行に行くことにした。見たいものを沢山調べていた。北京駅からはリーズナブルな現地のバス観光ツアーに参加してみようと計画していた。バスに乗り込んだ瞬間、ああ、私以外全員中国人だ…と急に緊張した。バスガイドさんがマイクで「日本からの参加者もいるわ、仲良くしてあげて」みたいな内容を言ってくれた。みんなからの注目をあびながらバスはあっという間に40名の満席になり、昼の12時には出発した。まだ初級の中国語では会話が続きにくいと思いつつも優しい迫力のあるおじさん、おばさんに囲まれてワクワクしていた。予定では八達嶺や慕田峪の長城を巡り、お土産店に立ち寄って最後に天壇公

園に行き、午後 8 時に再び北京駅に戻ってくるというスケジュールだった。バスの席で前に座っていたご夫婦がりんごをくれたり、タンクトップ姿のおじさん達と覚えたての中国語で会話してみたりしていた。明るい、声の大きいおじさん達に自分の祖父を思い出し、次第に私はその場になじみ始めていた。

しかし午後 6 時の時点で夕食に皆で鯉を食べているが、バスガイドさん曰く、これから明の十三陵とお土産店 2 箇所、最後に天壇公園へ行くと言う。午後 8 時に北京駅に戻れるわけがない。寮の門限に間に合う気がしないと焦り出した私は、鯉の味も分からなくなっていた。使える携帯電話も持っておらず、天津に帰る高速列車は何時まで運行しているのか、天津駅から大学までのバスは何時まであるのかと不安が募った。私はバスの運転手とガイドさんに状況を説明し、スケジュール通り 8 時に帰りたいと紙に書いて伝えたが、どうしようもできないと言われた。

そうこうしているうちにバスは次の観光地、明の十三陵に到着した。困り果てている私を見た同じツアー客のおばさんが話しかけてくれた。私は拙い中国語で「我得回宿舍楼！到十点！（私は学生寮に戻らなければならない！10 時までには！）」と伝えた。おばさんは手当たり次第他のツアー客に私が困っていることを伝え、その場にいる全員に相談してくれた。色んな意見が出たが、その中のひとりが英語を話せる職員を連れて来てくれた。その職員に英語で事情を説明すると、今勤務が終わった職員がいるから西直門駅まで車で送ってくれると言うのだ。それは申し訳ないと思っていたら、私よりも先に話を聞いたツアー客のみんなが喜んでくれた。

結局ご厚意に甘え車に乗り込もうとした時、おばさんが住所の書かれた紙をくれた。住所の下には、宁夏に遊びに来てね、と書かれていた。寮に着いたのは午後 10 時 30 分過ぎであったが、私の心は感謝の気持ちと全員に挨拶が言えなかった残念な気持ちでいっぱいだった。

滞在の 3 週間はあっという間に過ぎ、帰国する時には既に第二の故郷のように感じていた。

日本着いてすぐに、私はあのバスツアーで一番お世話になったおばさんに感謝の手紙を書きポストに出した。

中国で出会った人々から教わった、困っている人を助けること・国や宗教に関わらず人と仲良くする和の精神を学んだ。人見知りだった私だが、この経験を機にその後の大学生活では、小児科病院で勉強を教えるボランティアや、ラオスでの国際教育ボランティアに積極的に参加した。国や言語を越えて助け合うこと、コミュニケーションを取ることを恥ずかしいと思わなくなっていた。中国は私に生きる上で大切な理念や価値観を教えてくれた大切な場所である。

## 恩返しの第一歩

狛江第六小学校  
真野 朝子

「あなたは遠くから来たのだから私におごらせて！」これは上海で再会した中国の友達は何度も私に言った言葉だ。彼女とはアメリカの留学中に会い、お互い慣れない土地での暮らしに苦労しながら励まし合った「戦友」だ。彼女やそのルームメイト達から老干妈

や中国式の朝食を教えてもらい、温かい思い出は留学後の私の中国語学習への意欲となった。

社会人になる前に、上海に3日だけ遊びに行き、私はご飯でも彼女と一緒に一回食べられたらいいなと思っていたが、なんと彼女は3日間ずっと上海を案内してくれた。そしていつも冒頭の言葉で私に払わせようとしなかった。各地の入念な下調べなど、彼女の一生懸命な姿に感動し、私もいつか日本で彼女を精一杯もてなしたいと思った。

私は2019年4月に小学校の教員となり、毎日必死だった1年目に未曾有のことが起こった。2020年1月初め、新型のウイルスが中国で流行りだしたと聞き、友達のWeChatや中国のネットニュースを見ると、大変なことになっていた。私にできることはないかと考え、当時日本の薬局にはまだマスクがあったので、マスクを3箱とお菓子を彼女に郵送した。どうにか無事に届き、とても喜んでもらえて、少しは助けになったかなと安心した。

しかし翌月2月には、日本にもコロナが拡がり、社会生活に規制がかかりだした。小学校の子どもたちの生活も例外ではなく、放課後の遊び場が次々と閉鎖された。そのことを当時担任していた子どもたちに伝えると、ブーイングだけでなく、「中国のせいだ！ふざけんな！」とわめきだした。普段、子どもたちの前で感情的にならないようにしていた私だが、その言葉だけは許せなかった。あんなに心が広くて、義理堅い人たちのことを知って、言っているのか？誰がコロナになりたくてなるというのか。苦しくて、悔しいのは私達だけじゃない、中国の人たちだって同じだろう！涙が出そうだった。そのことを子どもたちに伝えると、少なくとも私の前で中国のことを悪く言う子どもはいなくなった。

新型コロナウイルス感染症を経て、私は子どもたちにメディアで報道される以外の中国の良さや、日本との文化的なつながりを知ってもらいたいと強く思うようになった。また、仕事でも変化があり、大学で英語を専攻していたこともあって、小学校の英語専門の教師になった。今は、中国にまつわる内容を取り入れた授業を日々行っている。例えば、5年生の「行きたい国」の英語表現を教える時には、まず世界各国を紹介し、興味をもつ機会を設ける。その際、中国の時は、万里の長城や故宮だけでなく、二胡の演奏や変面ショーの動画も見せる。変面ショーは特に人気で、お面をすばやく取り換える秘密を子ども同士で議論したり、学期末の行きたい国のスピーチで、中国に行きたい理由にする子どももいるほどだ。

他にも、3年生の「これは何でしょう？」What's this?」では、簡体字で書かれたスポーツ(羽毛球、排球、棒球など)のクイズを出し、子どもたちが英語でスポーツ名を答える活動をしている。知っている漢字から、意味を推測するのが楽しいようで、中国の簡体字と日本の漢字の違いに興味津々だ。次世代を担う子どもたちが、隣国のことをよく知り、将来の良好な日中関係を築く原動力に少しでもなれたら嬉しい。

ようやくコロナが終息し、徐々に中国からの観光客も戻ってくるようだ。彼女はまだ日本に来られないそうだが、街で会った中国の方には中国語で話しかけるなど、できる限りもてなしたい。これからも小学校の授業や、街中での出会いなど、自分のできることで、中国と日本の絆づくりに貢献していきたい。それが彼女に恩返しする第一歩だと信じて。

## 私が日中学生交流の旗手になるまでの軌跡

兵庫教育大学



私は中国語が話せる訳でもなく、中国に旅行したことがあるわけでもない。しかし自信を持っていえることがある。それは日本一、日中学生交流の促進に熱い思いをもって活動していることである。

大学3年生の夏、私は中国に行くことができなかった。新型コロナウイルスの影響で、上海への交換留学が中止になったのである。中国に渡航する機会を失うことは2回目であった。実際1回目は渡航が出来なかった訳ではないが、2年生の夏に、市の派遣プログラムで中国に渡航したものの、台風が到来し、4日間ホテル滞在に終わったのである。

留学が中止になった後、最初は中止という事実を受け止めることが出来なかったが、まずは国内で日中交流が出来る場所を探すことにした。

それから約半年間、多くの日中交流のオンラインプログラムを渡り歩いた。民間団体主催のものから内閣府事業まで、ありとあらゆる活動に参加した。その中で、私の日中交流に対する思いも変化し、「中国人学生と交流がしたい」という思いから「日中交流の場を創る立場になって、より多くの日中の学生を巻き込みたい」と思うようになった。

大学3年生の冬、「日中学生交流団体 freebird」という団体に所属し、加入後すぐに関西支部の副代表を任された。freebird は日中学生の相互理解の場を創出することを理念に活動する学生団体で、北京・上海・関西・関東の4支部を拠点に活動している。私が副代表に就任した時点での関西支部のメンバーはわずか5名であった。そのためSNSを活用し、関西の学生に向けて、freebird という日中交流の場があることを発信し、一緒に活動出来る仲間を探した。また、関西で日中の学生の交流会を1か月に1回実施した。そして約2年かけて、現在はメンバーを40人までに増やすことができたのである。

SNSを見て、freebirdの関心をもってくれた学生が、一人、また一人と増え、その度に団体としての活動の幅も広がった。このように関西地域で、日中交流を促進することができたことを誇りに思う。

私は日中交流を通して、沢山の笑顔を見た。そして沢山の経験を得た。発信をするために、SNS運用、目を引くポスターの設計について学び、文化交流イベント開催するために企画・運営についても学んだ。さらに、より多くの人に参加してもらえるよう、オンラインでも日中言語交換会などを実施した。日中交流にまだ関心を持ったことのない学生にも参加してもらうために、漢服・浴衣を来て街歩きなど、多様なテーマのイベントを開催し、関西全域の学生にこの場を届けようと努力した。日中の学生で集まり、沢山の笑顔が生まれるfreebirdという団体は私にとって大切な場所で、日中交流を通じて、笑顔が増えることや、後輩が成長する姿を見ることは私の大きな喜びである。日中という2か国を共通点にし、学生が集うことのできるこのプラットフォームは私が一生絶やしたくない場である。

修士1年生になった春、日中交流の場を創る側になって約1年半経った頃、私は大きな機会を手にした。それは、西日本地区日中友好交流大会に、日本人学生代表として登壇することである。私の日中交流への思いが、まさかこのような大きな場に届くなど考えたことがなかった。私は、より多くの日中の青少年を巻き込み、更なる日中友好の高まりを目指していくことを誓った。

私はこの先必ず成し遂げたいことがある。それは、中国で日中学生交流の祭典を開くことである。修士2年生になった現在の私は、中国語も話せるようになった。今まで中国語が話せない状態でも、これだけ多くの学生の共感を呼ぶことが出来たのである。中国語は

話せるようになった今、より多くの学生をこのプラットフォームに巻き込むことができると確信している。

私は未来に向けて、日中交流の推進に情熱を注ぎ続けたい。そして、「日中学生交流団体 freebird」という日中の学生にとって大切なこの場所を守り続けたい。

## 近未来都市上海での学び

ウミトロン株式会社  
村上 千賀子

“激変した上海”で変わらないものを見つけた。

2019年の初めに上海を訪れた。当時私は、流通向けのDXサービスの企画営業に携わっていた。日本ではテクノロジーによる人手不足解消や機会の最大化に期待が集まる一方で、実用化にはほど遠く、どのように取り組むべきか悩み、行き詰まりを感じていた。訪問の目的は、日本より先にテクノロジーの発展で近未来の都市に発展した上海のライフスタイルを視察し、成功事例と言われるサービスを調査することであった。

上海から学ぶというのは意外だった。10年前に見た、渋滞する二人乗りバイクや、エアコンの室外機と鉄格子がついた古いビルが私の上海のイメージの全てであり、テクノロジーとは程遠い場所に思えたからだ。しかし、上海の景色は激変していた。たった10年の変化だとは信じられなかった。人々の生活も大きく変わったのだろうと想像しながら、調査を始めた。

旅行者は登録できないサービスが多かったので、現地の知り合いに頼んで使っているところを見せてもらった。タクシーの代わりに配車アプリで車を呼び、盒馬鮮生に行って、そこでも同様にアプリを使って買い物をし、フードコートで食べた。瑞幸珈琲では店員さんに現金を渡して、代わりにコーヒーをモバイルオーダーしてもらった。

日本では実用化されていない仕組みばかりで新鮮だった。うまく機能するか半信半疑だったが、実際に体験するとその仕組みはごくシンプルであることがわかった。注文や決済など特定の部分だけをデジタル化して、接客やその他のオペレーションは人がサポートしてサービス全体が円滑に利用できるようになっていた。

上海の人はとても臨機応変で優しかった。ハイテクなサービスを使いこなしながらも、リラックスしていて人間味に溢れていた。テクノロジーが浸透していても、彼らの生活や価値観は10年前と比べてそこまで変わっていないことに気付いた。たった数日間の滞在だったが、旅を終える頃には、初日に感じた“激変した上海”の印象は違うものになっていた。

上海での体験が、思い込みに気づかせてくれた。

滞在中、最も印象的だったのは、サービスそのものではなく、その過程で出会った人々とその振る舞い方だった。私は日本で、テクノロジーの意義を誤解していたことに気が付いた。理想的なテクノロジーの実装は、人々の生活様式に大きな変化をもたらすものと考えていたが、それは思い込みだった。いつもの生活の中にあるシンプルなステップを自動化・デジタル化するためにテクノロジーを使うのが理想的だと気づき、進め方のアイデア

が浮かぶようになった。それは、私にとっては霧が晴れるような体験だった。

無人店舗のテスト店舗の見学でも意識の違いに気付かされた。やってみないと分からない、ダメならやめればいいぐらいの気軽さで、シンプルな検証がされていた。失敗を恐れないどころか、むしろ学びとしてポジティブにとらえるような価値観が社会に浸透していると感じた。挑戦することへの心理的抵抗が大きく、失敗をリスクとして避けたがる日本とは真逆の印象を受けた。軽やかに試行錯誤していった結果がこの上海の発展の秘訣だと感じた。

中国と日本、似ている部分が多いからこそ、違う部分から学べる。

中国と日本では、古くからの文化に根ざした共通の価値観がある一方で、政治や経済などによる現代社会における価値観は異なっていると感じた。似ている部分もあるからこそ、違う部分を見つけると新鮮に感じ、それまで当たり前だと思っていたことに疑問を持てるようになる。お互いの姿から刺激を与え合って学べる良い関係だと思った。

この体験がきっかけでもっと中国のことを知りたいと思うようになった。そして、中国語の勉強を始めた。中国を知れば知るほど、日本に対しても発見がある。これからも中国から学び、それを活かしていきたい。

## 二胡の花窓は世界の窓

九州大学  
芸術工学府修士2年  
長谷川 愛

私はカリフォルニアにある大学で学んでいる。今年の3月、大学の休み期間を使い、友人とサンフランシスコへ出かけた。旅をする目的は、アメリカ最大級のチャイナタウンを訪れること。中華料理が大好きな私。大学で中国語を専攻している私。また、米国での生活で、食のギャップに苦しみ、少しでも日本食に近い料理を楽しみたい私。これらのことが相まって、チャイナタウンへの旅に心を躍らせていた。

食べ歩きをして早数時間。通りすがりの建物の「抗日」の2文字が目飛び込んできた。その建物は「海外抗日戦争記念館」であった。扉の中には、中国人の案内人が1人。日中戦争の対日抗戦を顕彰する目的のために建てられた建物である。完全に平和ボケをしていた私にはこの「抗日」の2文字が強烈だったことを今でも覚えている。チャイナタウンの食事には大満足したものの、この強烈な2文字に動揺しながら旅を終えた。

「抗日」の2文字。この2文字が目飛び込んでから、私の父や高校の社会科の先生から教わったことを思い出した。それは「戦争中に日本が中国に侵したこと」だ。当時、日本軍は身勝手に中国人の戦争捕虜や平民を殺したのだ。この事実を自分自身で改めて咀嚼するようになった。もちろん、日本も戦争中、あまりにも無惨な形でたくさんの尊い命を失った。胸が裂けるような事実である。しかし、戦争中のことに関して、日本の教育で教わるのは、「日本が被害者としての立場」であることが多いだろう。日本が他国に犯した罪、中国の方々に犯した戦争犯罪を意識して学ぶことができる時間は圧倒的に少ない。抗日、反中国という感情は、お互いの感情を受け止め、尊重することができていないが故に生まれるものだと改めて気づいた。

終戦から 77 年。日中国交正常化から 50 年。中国と日本の関係は良好だと言えるのだろうか。中国人は敵と思う日本人も一定数いるのではないだろうか。地理的、経済的にも密接な関わりを持っている中国と日本。また、日本は中国からさまざまな文化的、歴史的恩恵をこうむっている。これらを踏まえると、現在の中国と日本の関係は正直悲しい事実であり、同時に変えていくべき事実でもある。

私も大学に進学するまでは、上記で述べた「一定数いる日本人」のうちの 1 人であった。おそらく幼い頃から目にしていたメディアを鵜呑みにしていたからである。

しかし、大学生活によって、私が抱く中国人に対するイメージが変わった。大学では中国から来た友達も作ることができた。彼らとの楽しい食事の時間。親身になって中国語を教えてくれる彼らの姿。私がそれまで抱いていた中国人に対するイメージが変わった。また、それと同時に、特定の側面からだけで中国人を判断していた自分自身の視野の狭さを認識した。

大学生活で感じた、私たち学生の無限大の力、そして、1 対 1 の関係の大切さ。きっと中国人に対して負のイメージを持っている日本人の学生もいるであろう。もしかすると、特定の面から中国人を捉えているのかもしれない。だからこそ、大学生活で出会う中国人、または中国に対する大学での学びを大切にしてほしい。この、自分対 1 人の中国人、自分対 1 つの中国の学びが身近な人に伝わり、それが波及効果となってよりスケールの大きい物事への良い影響力になる。学生こそ、この波及効果の起点としての役割を担うことができるのだ。

最後に、私が今、日中関係向上のために果たせる使命とは何なのか。それは、大学で学んでいることを活かすことである。米国の大学生として日々多様なバックグラウンドを持つ友人と授業を受け、また、日常生活を送ることで、かけがえのない学びを得ることができた。相手の価値観を受け入れる力。傾聴力。コミュニケーション力。これらの力を日中交流の場や日中関係向上のためにも反映していくという使命を全うしたい。

## 爷爷（いえいえ）の帰路

立命館大学  
文学部人文学科 4 年  
望月 泉

「哎呀アイヤー」夕暮れのオレンジと紫の砂漠に染まる列車の中で響き渡った。

二カ月前、私は中国に留学中で、敦煌から蘭州に移動する寝台列車に乗っていた。おじいさんは二段ベッドの下段、私は上段だった。私は下段のベッドに腰掛けさせてもらい、おしゃべりを始めた。私が北京大学の学生だということを出身を聞かれたので日本、と答えた。すると、おじいさんが不思議そうな表情を浮かべるので、私は外国人です、日本から留学に来ました。と説明すると「哎呀アイヤー」である。長い間おじいさんが目を見開き驚いているので段々と心配になってきた。ご老体を驚かせて健康に良くないのでは、日本人だという理由で宿泊拒否されたように罵倒されるのでは、と気をもんだ。おじいさんはひとしきり驚いた後私の中国語をほめ、中国と日本国家間に問題は山ほどあるが、国と個人は別だと言ってくれた。とても紳士的な態度であった。

切符の点検で、おじいさんは手帳を見せていた。それは退役軍人の優待証明だった。お

じいさんは元軍人なのだ。退役軍人と日本人が同じ個室なんてことがあるのか、軍関係の人が日本人である私にあんなに友好的に接してくれるものなのか、と静かに驚いた。おじいさん曰く、軍人優待で列車は半額、そして観光地でも優待がありその恩恵で新疆旅行は節約できたのだ、と嬉しそうに話してくれた。私はチベット旅行の写真を見せ、二人でご当地グルメや景色の話に花を咲かせた。

おじいさんは私が一人旅だと知ると女性だからと一人で使える個室はないか車掌さんに掛け合ってくれたり、ミカンやお茶を分けてくれたりと至れり尽くせりであった。おじいさんが夫婦二人で太極拳をする写真を見せてくれたので持っていた日本製のフェイスマスクを奥様に、と渡した。するとおじいさんはイリで買った香水を出し、香水に明るくないのでかいでくれ、と私に頼んだ。私が嗅ぎ、いい匂いだよ、とおじいさんに言うと気に入ったならあげるよ。と言われてしまい鈍い私もさすがになぜおじいさんが香水を出してきたのか理解した。私に渡す口実だ。私は本当に申し訳なくてそんなつもりでフェイスマスクを渡したわけじゃない、せっかくのお土産だからご家族に渡してくれ、とやんわり香水を返したのだが、なかなか受け取らない。おじいさんの体に軽く押し付けた。しかしそこは退役軍人、いかんせん体幹が強い、びくともしなかった。爷爷にいえいえ断る攻防をしばらく続けるも両者膠着状態。「君にあげなかったら奥さんに怒られちゃうよ。」と言われて私はとうとう降参した。

おじいさんは今年 77 歳、山東省出身。山東省といえば青島ビールだよ、と私が言うと、改革開放後に日本産ビールが中国市場に参入し、青島ビールのパイを奪ったので国産ブランド保護の必要性がでてきたことを教えてくれた。新疆での初めての乗馬や、蘭州では博物館に飛馬踏燕の像を見に行くことを話してくれた。意気投合し話し続けたのですぐに消灯時間となった。

翌朝終点の蘭州駅で、荷物を預け終えるまでおじいさんはずっと後ろで見守ってくれていた。最後まで私の帰路を心配し、最後は「一路顺风」とお互いの旅路の無事を願い別れた。

バスに乗って宿に行く途中、二年前に亡くなった実のおじいさんを思い出した。コロナに感染して亡くなったのでお葬式はおろか最後に顔を見ることすらかなわなかった。火葬後に見た白いカルシウムの塊、泣けなかった。それが、なぜか異国の地で強烈に実感できたのだ。大好きなおじいちゃんもういない、二度と旅行の話をすることも、お土産を渡すこともできない。異国でようやく熱い涙が頬をつたった。

連絡先を交換していないので山東省のおじいさんと私は多分もう会えない、だけど実の孫のように接してくれたことは絶対忘れない。おじいさんも私と同じように家族や友人に私とのやり取りを話してしてくれたらそれより嬉しいことはない。一路顺风。

## 私の役割

大阪医専  
高度看護保健学科 1 年  
白方 晏

私は父の仕事の関係で中国上海で生まれました。2歳の頃までなので記憶には残っていませんがそのルーツを大切にしたいという思いやその後何度か中国に旅行に行った事で小学校時代から中国に興味を持つ様になりました。辞書を片手に独学で中国語を学び、小、中、

高等学校で中国語スピーチコンテストに数回出場し大学は外国語学部中国語専攻に進学しました。四声の高低が難しく何度も壁にぶつかりましたが、一つずつ乗り越えコンテストに出場するたび、難しさ以上に中国語の音の美しさにどんどん惹かれていきました。これらの経験を活かし大学1年生の夏休み、私は桜美林大学主催の中国語カラオケ大会に参加しました。同済大学嘉興キャンパスで行われた決勝大会で私は北京オリンピックの主題歌『我和你』を披露しました。手拍子や一緒に口ずさんでくれた観客に背中を押され、歌詞の「在北京」という箇所を「在嘉兴」に変えて歌いました。歓声が湧き起こった時「我和你心连心同住地球村，为梦想千里行，永远一家人」という歌詞の通り皆、同じ地球の一員なんだと胸が熱くなりました。この曲はデュエット曲ですが今回上海では2人のパートを1人で歌いました。歌い終わった時私は「もし、私とデュエットしたい方がおられたら大会終了後私の所に来て下さい」と言い残し舞台を去りました。終了後、日本語を勉強している同済大学の学生が「ぜひ友達になって欲しい」「次回と一緒に歌いましょう」と声をかけてくれました。同済大学の寮ではこの曲を含め彼女達が紹介してくれた周杰倫、温嵐のデュエット曲《屋頂》と一緒に歌いました。時が経つのをわすれるくらいとても楽しい時間を過ごしました。

今、私は中国語の勉強に歌はとても有効な手段だと感じています。第一に歌は中国語に必要な不可欠な声調に左右されません。歌詞をメロディに合わせる為、日本人にとって難しいそり舌音や有気音の練習も自然と身につきます。また歌は言語だけでなく中国の自然や人々の暮らし、歴史も感じることができます。例えば《茉莉花》の曲は江南地方の豊かな水郷を感じさせてくれ、《青藏高原》の曲は雄大な草原で生活している人々を連想させます。また阿蘭の《赤壁》や林俊傑の《曹操》は悠久な歴史の世界へと導いてくれます。それは授業で得ることのできない貴重な体験であると同時に異文化を理解する有効な手段であると感じています。

中国の歌に魅了された私ですが卒業後の進路を考える時期に差し掛かった時、新型コロナウイルスが世界的に流行しました。私もやっとの思いで掴み取った中国への交換留学があることか出発1か月を目前に中止となりました。必死でやってきたことへの思いや楽しみにしていた海外生活が遠のいていく落胆は大きくその頃の私は寝ても覚めても嘆いてばかりいました。繰り返される感染状況のニュースや未知のウイルスに怯え街がマスク姿の人で溢れた時、私の気持ちにも少しずつ変化が現れ始めました。いつしか留学へのこだわりはほぼ消え医療現場のひっ迫した現状に釘付けとなりました。「中国語を勉強している自分に何かできることはないだろうか」それは同時に自分が置かれた場所を再認識する時間となり気持ちを見つめ直す絶好の機会となりました。思い起こせばコロナ流行前の日本には中国人の旅行者で観光地が潤い中には健康診断に訪れる人もいたではないか、コロナが終息した時にはそのような中国人をサポートできれば、と考えるようになりました。今、私は看護師と保健師を目指して勉強しています。将来、中国語を活かし、歌で感じた中国の自然や習慣を心に刻みながら数ある国々の中から日本を選び訪れくれる中国の人と関わりたいと考えています。

## 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2023」

### ★入賞

## 日本をリードする技術

同志社女子大学  
表象文化学部英語英文学科1年  
田中 玲名

これが中国のゲーム？そんな感想を抱いたのは三年前のことだった。私は生まれた時から両親や周りにいた友人たちの影響を受け、ゲームをすることが大好きな女の子として育ち、今まで幅広いジャンルのゲームをプレイしてきた。

その中でも、RPGと呼ばれる主人公を操作して敵と戦ったり、スキルや必殺技のレベルを上げたり、目的を達成するために行動するスタイルのゲームが好きで、特に任天堂が発表した「ゼルダの伝説ブレスオブザワイルド」は好きなゲームランキングの三本指に入るほどであった。

しかし、二〇二〇年にリリースされた中国産のゲーム「原神」をプレイしてそのランキングは変動した。原神を知ったのは、同じ趣味を持った友人から原神やってみてよと勧められたのがきっかけだった。このゲームを知るまでは、日本は中国に比べて技術面や生活面などのあらゆる点において発展しているので、中国にこんなにも作り込まれたゲームを作れるわけがないと考えていた。

その理由は、日本の商品をさも自分たちが作り上げたようにコピーし、大量生産しているからだ。私はデザインを担当したわけでもなければ、何か発明をしたわけでもない。けれど、自国の商品がぞんざいに扱われていることを知り、中国はコピーすることしかできない国という印象しか抱くことができなかった。しかし、原神は今までにプレイしてきたものとは大きく異なっていた。中国だけでなくアジアや欧米にわたって多くの人にプレイされている原神は、プレイヤーは移動の制限なく自由に動き回ることのできるオープンワールドと呼ばれるデザインで、ルールに縛られることなく自分なりに動き、楽しむことができる。ストーリーはとても緻密なもので何度も見返して考えたいようなものであり、ゲーム中に流れる音楽は場所や状況によって千変万化し、世界で屈指の交響楽団によって収録されている。特に、中国がモチーフとなっている璃月という地域では中国楽器が用いられていて、中国特有の絢爛豪華なイメージが浮かび上がるバックミュージックが流れるので大変気に入っている。また、多言語で遊ぶことができることもプレイヤーにとっては嬉しい要素の一つである。原神を日本の一般的なゲームと比較すると、一人一人のキャラクターの装飾はとても繊細でかつ、攻撃モーションがそれぞれのキャラクターの性格や特徴に当てはまっていてアクロバティックに動くだけでなく、綺麗なエフェクトは他に見ないものであり、私はすぐに原神の虜になった。

今、中国は日本よりも目まぐるしい発展を遂げている。少し前には東京の新宿に猫が飛び出しているように見える広告がテレビやインターネットで一時期話題になった。しかし、すでに中国では立体的に見える広告が作られていた。確かに、中国は日本が法隆寺を建てる前から万里の長城と呼ばれる大きな壁を築き上げていているように、何千年前から中国は卓越した技術を持っている。

先述したゲームだけに限らず、経済、技術、社会といったあらゆる場面で日本よりも秀でた技術を持っているように思える。私は現在大学一年生で、第二言語として中国語を履修し、学んでいる。中国語を学ぶ過程を通して、中国人はメンツを大事にしたり、体を冷やさないために常温の飲み物を好んだりなど、中国人の性格や文化を少し掴むことができたように感じた。でありながら、中国人の先生が話してくださることやインターネット、書籍の中で知った外側の知識でとどまっているため、内側の中国の実態はわからない。だから、自分の感性を磨き、視野を広げるため早いうちに中国に渡航し、そこにしかない本

物を見て、中国の今までとこれからの進歩をこの目で見納めたい。

## 憧れの地、中国

広島県教育委員会  
広島県立広高等学校  
柏村 淑美

私の中国とのつながりは書道である。小学校2年生の誕生日に書道を始めた。最初は習っている友達について行った興味本位で、上手に書けるようになることが嬉しかった。毎回持ち帰った作品を母や祖母が褒めてくれ、冷蔵庫に貼ってくれていたことを覚えている。中学・高校と進むに連れて自然と書道を学びたいと思うようになり、大学では書道を専攻した。そこで書法だけでなく中国の歴史や書道史について学んだ。金石学が専門の教授について、中国古代の歴史について漢文を通して学ぶ機会を得た。

中国についてはそれまでマンガの『封神演義』（藤崎竜著、集英社コミックス）やゲームの『三國無双』（コーエーテクモゲームス）、映画の『レッド・クリフ』（東宝東和/エイベックス）などで知っている程度で、漠然と「書道の本場」であるという認識ぐらいしかなかった。後々になってマンガや映画を見返してみると、木簡に文字を書いているシーンがあったり、時代に即して隷書体が使われていたり、「なるほど」と思う部分があって再度楽しむことができた。大学では書道史や中国史の授業は書法の授業に比べると少なかったが、歴史を知るうちに次第に、それまでただ書いていただけの文字に当時の時代背景が重なって見えるようになり興味を持った。「紙が発明される以前だから木に書いていた。木に書くから必然的に縦角が協調される」など、当時の生活様式に基づいた文字や書法の発展の様子に親近感が湧いた。特別なもの、特殊技術のように感じていた「書」というものが、人間が実用的なものとして書いていた身近なものに思えた。

そうして自然と「中国」という地に興味を抱くようになった。日本にまだ文字すら無い時代にすでに国という制度があり、文字をはじめ度量衡や青銅器、兵法や宗教などを作り出して一大文明を築いていた中国。広大な土地と雄大な自然、いくつもの民族と文字や衣装、食文化。書道を学びながら、字そのものよりもその時代や書いた人物に思いを馳せた。教員を志していたため大学4年生では書写書道教育関係のゼミに入るという選択肢もあったが、中国書道史のゼミを選び、卒論を書いた。まだまだ解明されていない古代の文字文化に特に興味があり、今後も勉強し続けていきたいと思っている。

大学卒業後、高等学校の書道の教員になって10年が経つ。昨年から本格的に中国語の勉強を始めた。これまで中国に行ったことが無くいずれは行ってみたいと思っているため、その時に中国語を話せるようになっていたいという気持ちと、言葉を理解すれば書道の勉強にも役に立つのではないかという気持ちからである。中国語は発音やリズムが綺麗なものが多く好きだ。私たち日本人が日常使っている漢字もそのまま発音が変わる。時には同じ漢字でも意味が変わる。難しくもあり面白い。自分の名前が同じ漢字のままで読む音だけ変わることも楽しい。言葉を理解できれば、生活文化や書法がもっと体感として理解できるのではないかと思う。とはいっても現在は子育てと仕事に追われ、通勤中に車でCDを聞くぐらいしか時間が取れないでいる。もう少し子育てが落ち着いたら、きちんと時間をとって勉強したい。

授業で書道を教えるときには、書法だけでなく歴史や文化も伝えられるようになりたいと常常思っている。文字を書くことがメインではあるが、その背景も知るとより理解が深



まると思う。筆で文字を書くことは「難しい」と敬遠されがちだが、特別なものではなくあくまでも実用的なものとして書をとらえてもらえると嬉しい。いずれは実際に中国に行き、文化遺産等を実際に見て歩きたい。そしてその際にはぜひ通訳を介さず、中国語で自分でコミュニケーションをとりたい。

## 人生を変えた出会い

京都産業大学  
外国語学部アジア言語学科4年  
浅野 りつる

出会いは、自分の価値観や世界感、時に性格までも大きく変えることがある。私の場合、高校時代に人生を変える思いがけない出会いがあった。

私は私立の特進コースに進学したが、内向的という性格もあり、クラス全員がライバルという感じの特進クラスに馴染むことがなかなかできず、いつも一人で過ごしていた。そんな時、いつも隣のクラスから壁越しに明るい笑い声が聞こえてきた。楽しそうなクラスの雰囲気羨ましく、彼らと仲良くなりたい、話をしてみたいと思っていた。私の学校は戦前からアジアの留学生を受け入れており、私の在学中には一学年に約15人の中国人留学生がいた。彼らの目標は日本の有名大学に入ることなので、日本人の特進クラスと合同の科目がいくつかあった。入学からしばらくして彼らと一緒に授業が始まった。これは絶好のチャンスだと思い、勇気を出して思い切って話しかけてみた。すると、彼らは「私たちは中国から来た留学生です。よろしく。」と言って、握手をしてくれた。とてもフレンドリーな雰囲気で私を受け入れてくれ、私はもっと早く声をかけに行けばよかったと後悔した。それ以来、私は彼らとより一層仲良くなりたいと思い、中国人留学生のクラスによく遊びに行くようになった。休み時間に留学生クラスに行くと彼らはいつでも歓迎ムードで私を迎え入れてくれ、日本語で日本の好きなところをたくさん話してくれた。特に盛り上がる共通の話題は日本のアニメやゲーム、漫画だった。会話をしていくうちに、彼らが努力して日本語を使って日本のことを喋ってくれているのに、私は中国語の挨拶ひとつすら言えない、中国について何も知らないということが恥ずかしく申し訳ないと思うようになった。

ある日、体育の授業でリレーをすることになった。私は中国人留学生らと同じチームだった。私は色々なことを気にする癖があるため、中国人留学生らに「私のせいで負けたらごめんね。」と言った。すると、彼らは「大丈夫！できる！」と言ってくれた。一緒に過ごしていて感じ始めたことだが、留学生たちは困難なこと、いやな事があっても「没事儿」精神で、いつも前向きで明るくたくましかった。そんな彼らと一緒に過ごしていると引っ込み思案で事なかれ主義だった私も徐々に感化されてきた。私も彼らのように強く、小さな事は気にしない、自分の目標のために積極的に行動する、そんな人間になりたい、中国と中国人の事をもっと知りたい、中国語で彼らと話したいという思いが日増しに強くなった。高校入学時、母が英語塾をしている事もあり、漠然と英語教師を目指していたが、この中国人留学生らとの出会いにより専攻を中国語に変えた。大学では何事もチャレンジだと思い、内向的な性格を変えようとスピーチコンテストにも積極的に参加した。高校卒業後、彼らは大学進学で上京したり、コロナの影響で中国に帰国したり、みんなバラバラになってしまった。しかし、今でもSNSを通じて、連絡を取り合っている。私が中国語の勉強でわからないところがあれば、彼らはずっと優しく教えてくれ、私の中国語の学習を温かく見守り、助けてくれている。

彼らとの出会いのおかげで中国という国が大好きになり、また自分が生まれた日本の良いところも見直すことができた。私の視野を広げ、人生を大きく変えてくれた中国朋友。今度出会ったら中国語で会話し、「みんなが助けてくれたお陰だよ。」と中国語でお礼を言いたい。日本で困った事があれば今度は私が手助けしたい。私だけでなく、日本中でこんな出会いが沢山あるはずである。国家間では日々、様々な問題も起こっているが、個人間では温かい交流がますます増えるように両国にきれいな橋がたくさんかかることを願っている。

## されど僕は嫌いではない

九州大学大学院  
農学研究院 特別研究員 PD  
高井 優生

「ポテトが少ないと思う」この言葉を発するかどうか、上海のファストフード店で僕は迷っていた。

事の発端はオーストラリアのメルボルンまでの道中、飛行機の乗り換えで上海に立ち寄ったことである。乗り換え目的とは言っても、初めて来た中国。空港で時間をつぶすのももったいないので少し観光することにした。とは言え、観光地を巡るような時間はないので、できることと言えば街中を少し散策して昼食を食べるくらいだろう。小腹も空いていたので、ふと目に止まったファストフード店に入ることにした。

商品を購入してから席に着くタイプのお店であろう。レジの横にあるメニューを見てみるとどこことなく中国らしさを感じるような商品もある。ゆっくり考えたいところだが、少々不愛想な店員さんはそれを望んでいないようである。お店の看板メニューだろうか、一番大きく写真が載っているハンバーガーとフライドポテトのセットを注文する。

会計を済ませると店員さんから「Japanese?」と聞かれた。特に深く考えずに「Yes」と返答すると店員さんに舌打ちをされた。明確な舌打ちである。不穏な空気の中、注文した商品はトレーに投げつけるように置かれた。その態度に驚きながらも最も目についたのはポテトの量であった。3本しかない。正確な容量はわからないが、どう見ても数十本は入るであろう容器に3本しかポテトが入っていない。「ポテトが少ないと思う」と言おうか迷ったが、店員さんが僕もしくは日本人に対して良い感情をもっていないのは明白であった。当然のことながらお店には中国人ばかりである。ここでトラブルを起こすのは賢明ではないと判断し、無言でトレーを受け取った。

まだ少し肌寒い時期ではあったが、店内の空いている席を横目に外のテラス席へと移動する。早く食べてその場を立ち去ろうと思っていた。中国には反日感情をもっている人がいることは知っていたが、実際にこのような対応をされたのはショックである。なんとも表現し難い感情を感じながらハンバーガーを食べていると、ふと僕のトレーの上に山盛りのポテトが置かれた。おそらくは通常の量であろうが、目の前にあるポテトと見比べるとかなりの山盛りに見えた。

視線を上げると僕と同じくらい、もしくは少し若いくらいだろうか、一人の女性がテーブルの横に立っていた。このポテトは彼女が置いたのだろう。浅めの深呼吸をした後、彼女が英語で話し始めた。少し早口であったが「日本にもいろいろな人がいるように、中国にもいろいろな人がいる。だから、さっきみたいな人もいるけど、中国人全員が日本のこと

を嫌いなわけじゃない。だから、さっきの経験で中国を嫌いにならないで」ということであつた。僕も（おそらく彼女も）そこまで英語が得意ではなかったため、内容を完璧には理解しきれてはいないだろう。ただ、それでも彼女が「中国を嫌いにならないで」という気持ちを伝えようとしているのは痛いほど分かつた。

それを伝えた後、彼女は足早に立ち去ってしまったため、名前はおろか、今では彼女の顔さえもはっきりとは思い出せない。しかし、彼女のおかげで僕は今でも中国が嫌いではない。もしあの場に彼女がいなかったら、僕は中国に対して良い感情はもたなかっただろう。あの店員さん一人への感情だけで中国を嫌いになっていたかもしれない。慣れない英語で、しかも見ず知らずの異国の人間に話しかけるのはとても勇気のいる行為だったと思う。ただ、僕が今でも中国のことを嫌いではないのは、そして様々なコミュニティにおいて「まあ、いろんな人がいるからな」と少しだけ人間関係を達観できるようになったのは、まぎれもなくあの時に彼女が勇気を振り絞ってくれたおかげである。直接お礼を言うことは難しいだろうが、何かの形でこの感謝を彼女に伝えたいと願うばかりである。

## 「らしい」から「実感」へ

横浜国立大学  
経済学部経済学科1年  
倉持 和輝

小学校の社会の授業で、日本の近くには中国という国があることを知つた。「人口はかなり多いらしい」、「日本文化と密接なかかわりがあるらしい」。時折、ニュースで聞く上野動物園のパンダと中国のかかわり、「中国は思っているよりも私たちの生活に深くかかわっているらしい」。私は勉強が大好きで、孔子や孟子などの人物や、漢文を読むことはした。しかし海外旅行をしたことのない私にとって、それは実際にあるかもわからない国との終わらない綱引きをしているような感覚だったと記憶している。中国を理解できたと思つても、またわからない部分が出てくる。考えてみると、私の周りには多くの「中国」があつたにもかかわらず、それに気が付くことは無く、すべてが「らしい」という曖昧な形で記憶されていたのである。

今年、大学生になり横浜で一人暮らしを始めた。そして、そこには日本最大規模の中華街があつたのだ。美しい装飾品、きらびやかな門、鮮やかな赤で彩られた中華街を見て心が躍つた。本格的な中華料理を初めて食べ、今まで自分が中華料理だと思つていたものとは異なる味に中国という、身近でありながらはるか遠くの国を思つたのである。私が初めて「実感」した中国である。

そんな私は、大学で留学生支援団体に所属することになった。そこで仲良くなつたのが中国からきた留学生だつた。彼女は中国における正月や七夕の話、中国での食事のマナーについてなどを私に熱心に教えてくれた。「こんなにも近くにある国なのに、私は中国について何も知らない」と心から感じた。「実感」である。文化は知ろうとしなければ、それを知ることが出来ない。そして、文化を知ることがなければ、国を「実感」として感じる事が出来ないのである。

私は中国をもっと知りたい。世界史の授業で学んだことを実際に現地で見たい。現地の人々がどのような価値観で生活しているのかを知りたい。文明が栄えた理由を、この目で見たい。「実感」を持つには体験が必要である。そして、体験した人はその知識を周りの人に伝えていく必要があるのである。私はこれから先、自分の得た「実感」を周りに伝え、広げていくことで両国の関係をより強化する助けになりたい。

これまで、日本から出たことのない私でも、日々の生活に中国を感じる。日本に住む私たちは中国を「実感」として認識していく必要があるはずだ。これから先も、日本と中国は両国間の関係の強化をより活性化していくよう努力し続ける必要がある。そのために必要なのは国民一人一人が相互に両国間の文化の違いを理解し、尊重できる関係を構築することである。つまり、「らしい」で終わらせないことが必要だ。教育を通して知る。時には、実際に見て、文化を肌を感じる。そうして初めて知ることが出来るのである。

私が言えるのは、中国は日本にもあるということである。中華街、留学生、パンダ、三国志、など私たちの周りには中国へつながるドアがたくさんある。そしてそれを見逃してはいけないのである。これまでも、私たちは互いに良い影響を与えあいながら成長してきた。そしてそれはこれからも続いていく。「らしい」ではなく、もっと主体的に中国を知るべきである。私は「実感」している。日本の近くには中国という、長い歴史と素晴らしい文化を持つ国があるのだと。

## 中国へのトビラ

獨協大学  
国際教養学部言語文化学科  
岡田 好加

この作文を読んでくださっているあなたは中国というトビラを開けるための鍵を持っているだろうか。私はまだ数えるほどしか持っていない。ここでいう「鍵」とはあるものについて知ったり興味を持ったりする「きっかけ」とする。人は鍵（きっかけ）があつて何かの扉を開き、興味や考え、知識や視野を広げていくものだと考える。しかし一生のうちに一つも鍵を持たずに、名前も知ることのない国もあるだろう。だから私はこの数少ない鍵たちを誇りに思っている。そしてこれからもたくさん増やしていきたいと思っている。ここでは私の持っている鍵のいくつかを紹介していこう。

一つ目の鍵、それは高校の第二外国語の授業として中国語を選択したことである。この時は、日本と近く、人口も多く中国語は多くの人々に話されているため、話せるようになったら今後自分の役に立つのではないかと考え選択しただけであった。しかし中国語を勉強していくにつれ、楽しい・もっと中国について知りたいと思うようになった。私は今大学で中国語を専攻しているが、この時に中国語を勉強する選択をしていなかったら今どうなっているか想像がつかない。私はここからたくさんの鍵を見つけることとなった。

二つ目の鍵、それは音楽である。音楽を聴くことが好きで特に K-POP や洋楽をよく聞いていた。中国語を勉強しているうちに中国の歌をきいたことがないことに気が付いたのである。しかし勝手に、中国の歌は弦楽器が基調の伝統的な曲が多く自分がよく聴くようなジャンルの曲はないのではないかと思いついていた。これはほかの国の人々が日本人は毎日お寿司ばかり食べている、日本人はサムライといった固定概念と同じであろう。自分がこのような決めつけの気持ちを持っていたことにショックを受けたが、「知らない」とはこのようなことなのかもしれないとその時に気が付いた。偶然私が好きな歌手が中国語の歌をカバーしていて、初めて中国の音楽に触れることとなった。その曲を聞いた瞬間、今まであった私の固定概念がなくなった。好きな曲ばかりで他にはどんないい曲があるのか気になり調べたり、どんな意味なのか気になり歌詞を自分で訳してみたりと、中国の新たな側面を知ることができた。

三つ目の鍵、それは花である。花屋でアルバイトをしているときに、社長から中国は花の市場が盛んであることを聞いた。私はこれを聞いたとき想像がつかなかった。たしかに中国は華やかなイメージがあるが、生花のイメージがなかったからである。偶然テレビで斗南花卉市場が紹介されているのを見た。驚いて声も出ないほど大量の生花がそこにはあった。多くの国に輸出しているのだという。またここで中国の知らなかった側面を知ることができたのである。

このようにいくつかのきっかけを通して私は中国という国に興味を持った。周りを見ると、親が中国出身の方であったり中国に留学したことがあったり、幼少期に中国に住んでいたなど、自分より大きく立派そうな鍵を持っている人がたくさんいると感じてしまうこともある。しかしどんな鍵でもそれが鍵穴にぴったり入れば、それは素晴らしい鍵なのだとは私は考える。夜ご飯の餃子がおいしかったから中華料理が気になるな、これがその人の中国や中華料理の道を広げるものになれば、それは立派な鍵である。私は高校で中国語を選択したことで、中国についての道を開いたのである。たくさん持っていないなくても、一つだけでも、小さくても、自分に合った鍵と出会って自分の世界を広げていきたい。そして堂々とこれが自分の好きなものだといいたい。

## 映画に見る中国の不易流行

株式会社 EP ファーマライン  
小松 由依

この数年で中国のエンターテインメント、殊にアニメーションを目にする機会が増えた。今までは日本のアニメが中国へ渡っているイメージだったが、最近では逆に中国のアニメが日本へ入ってきて、さらに日本語の吹替版が制作されているケースも多い。ショートアニメから長編作品まで多岐に渡っている。

私が中国という国に対してずっと抱いてきたのは、パワフルで、少しノスタルジックな雰囲気もあるというイメージだ。これは幼少より親しんできた横浜中華街の影響が強い。異国情緒溢れる街並みの中で客を呼び込む快活な店員たちと、細やかな刺繍が施された色鮮やかな小物やチャイナドレス。

それから十年以上経ってから、私は短期留学のため初めて中国を訪れた。今まで抱いていたイメージに加わったのは、新しくて便利なものは積極的に取り入れるという、ポジティブな順応性だった。伝統的な胡同風の門構えの店頭では、老若男女問わずスマホを片手にコード決済で支払いをしていた。伝統的なものと革新的なものが融合している、その何ともちぐはぐな風景が面白くもあり、現代中国を象徴しているようで印象的だった。

これらのイメージは、中国のアニメ作品を観た時にも感じられた。最先端のアニメーション技術を駆使しながら、中国の伝統的なモチーフを扱い、観る人に元気を与えるような力強い作品が日本にやってきた。中でも、特に私が気に入っている長編作品を二つ例に挙げたい。

まずは「雄獅少年 少年とそらに舞う獅子」である。主人公が仲間と共に獅子舞の全国大会を目指すスポーツコメディと見せかけ、都市と農村の貧富の差や出稼ぎ労働の絶えない実態をも描き出している衝撃的な一面もある。そして何と言ってもアニメーションが圧巻だ。3DCG アニメーション技術を駆使しながらも、中国の水墨画風のアニメーションも混じる。写真かと思うほど美しい農村風景と、スクリーンいっぱい縦横無尽に動き回る獅子

たち。瞬きをしたり口を開けたりする獅子頭、また踊り手の手足の細かな動きは、実写ではないかと思ふほどリアルだった。獅子舞だけではなくストーリーのラストも、ただのハッピーエンドで終わらずにまた日常に戻り生活は続くことを示唆しており、それもまたリアルであった。夢のような出来事のあとでも、再び日常はやってきて、人々の生活は続いていくのである。

もう一つは、西安にある兵馬俑から着想を得たファンタジー、「兵馬俑の城」である。舞台は兵馬俑たちが暮らす地下世界であり、私はまずこの発想に感嘆した。彼らは人間のように地下に街をつくり、生活をしている。もちろん彼らは土でできた焼き物であるので、ヒビが入ったり割れたりする。兵馬俑には序列があり、身分は一生変わることはなく、どれだけ望んでも労働者が兵士になることはできない。だが、一見不可能にも見えるその状況を、自らの力で主人公は変えていこうとする。古代の兵馬俑をモチーフにしながらも、自分の生き方は自分で決め、道なき道を切り拓いていくこともできるという、現代を生きる私たちを励ますメッセージをくれる作品だ。

伝統と革新という相反するものの組み合わせ、さらに現代社会の状況をも映し出し、観る人に訴えかけるようなその力強さに私は感銘を受けた。何度でも観たいと思い、上映館を調べては足を運んだ。

日中間のエンターテインメントの交流の隆盛はとどまるところを知らず、勢いを増しているように思う。アニメーション作品もどんどん制作され、その情報を日本にいながらネット上で容易に得ることができる。私が今一番楽しみにしているのは、「長安三万里」という作品だ。今度は唐詩をテーマにしたものだという。詩や詩人から一体どんな作品が生まれたのだろうか。日本で観ることができる機会があることを切に願う。

## 日中学生交流団体で広がった世界と成し遂げたい未来

共立女子大学  
国際学部国際学科4年  
安藤 比奈

もし、高校生の自分に、現在日中学生交流団体で活動しているといったら、絶対に信じないであろう。

高校までの私は、海外に興味がなかった。学校の研修事業などで海外に行く友人を見て、なぜ海外に行く必要があるのだろうと思っていたほどだ。特にメディアの影響で、中国にはあまり良い印象がなかった。その一方、父が漢詩を研究している関係で毎年中国のいろいろな所に行っていた。その度に、中国はおもしろいとよく話してくれた。そのため、漠然とした興味を持っていた。

大学では、第二外国語で中国語を選んだ。父が、中国はこれから世界経済の中心になるので、きっと役に立つだろうとアドバイスしてのことだった。他に特別選言たい言語もないので、言われるがままに中国語を選んだ。第一回の授業が忘れられない。日本にはない四声、そこから紡ぎだされるハーモニー。日本語とまったく異なる響き。すぐさま心が揺さぶられた。

言語に興味を持ったことをきっかけに、もっと中国を知りたくなった。そこで、日中学生交流団体の門を叩き、運営として活動し始めた。それまで田舎にいた私は、中国人と関

わったことがほとんどなかった。これは、初めて多くの中国人と直接、そして深く関わった体験になった。彼らは今では中国語学習の私の一番の動機だ。以前は、メディアの影響で、中国人は行儀が悪い、主張が強いなどと偏見を持っていた。しかし、関わった中国人は、いろんな人がいた。静かな人もいるし、活発な人もいる。優しい人も、聡明な人も、いろんな人がいる。当然だ。日本人だっていろんな性格の人がいる。例えば私だって、日本人だが思ったことは比較的言うほうであるし、日本人らしくないとよく言われる。中国人だっていろんな性格の人がいるのである。国籍でその人がどんな人であるか決めることはできない。そんな当たり前のことに気づかせてくれた。一緒にイベントを計画、運営したりしていく中で、団体でできた仲間とは親しくなり、私にとって今や精神的支柱のような存在だ。

先入観を持たずに人と接する。意外とできていない人も多い。周りにも、中国人に会ったことがないのに勝手に悪いイメージを持つ人もいる。むしろ、会ったことがないからこそそのような偏見を持ち続けるのである。しかし、実際に中国人と交流することで、偏見をなくすことができる。

団体で出会った仲間は、中国語学習の最大の動機になっている。大学も学んでいることも違う、生まれ育った背景も文化も違う、そんな彼らが本当に好きだ。彼らはいつも刺激をくれる。もっと中国語を話せるようになって、距離を縮めたい、といつも思いながら勉強している。相手の言語で話すことで、直接コミュニケーションをとれて、より距離を縮めることができるはずだ。それに、言語が上手いか下手かに関わらず、相手が自分の母語を話そうとしてくれたら、気持が伝わる。

これからも、団体の仲間と日中学生間の相互理解を深めるようなイベントを開催したい。直接交流することで、日本人と中国人が先入観を持たず、一人の個々の人間として見ることができると信じている。

## 人情に溢れる国——中国

昭和女子大学  
国際学部国際学科  
佐藤 優夢

私が初めて中国を訪れたのは、2010年の夏休みである。当時私は小学生で、上海に駐在している父に会いに行くために、私と母と兄の3人で上海に行った。上海には1週間ほど滞在して、外灘や東方タワー、動物園、上海博物館を訪れた。上海を訪れて以来、私は中国に親近感を抱き、テレビ番組で中国についてやっているように見ようになっていた。私が中学三年生の時に、進路について担任の先生と面談をした。その際に、大学に入ったら英語ともう一つの言語を勉強したいと考えていて、以前から興味があった中国語を学びたいと考えていると先生に打ち明けたら、附属の大学の国際学科では中国語を学ぶことができ、さらにダブルディグリープログラムというものがあると教えてくれた。それから、私は昭和女子大学の国際学科で中国語を学ぶことを目標にしていた。

大学に進学すると中国語を専攻した。それからの大学生活は毎日のように中国語を勉強していた。多い時は、週に7コマ中国語の授業を受けていて、家に帰ってからも授業の予習・復習をしていた。一見大変なように感じるが、私はやっと自分が興味のあることを学ぶことが出来て、日々学ぶ喜びを感じていた。そして、2022年10月に私は日中国交50周

年記念、第40回全日本中国語スピーチコンテスト東京大会に参加し、大学生弁論部門の部で最優秀賞を獲得した。

私はダブルディグリープログラムに参加しているため、本来、大学二年前期までは日本、後期から大学4年次前期までは上海交通大学へ留学する予定だった。しかし、新型コロナウイルスの流行により、2022年12月になって、私はやっと上海へ留学した。私が人生の中で上海を訪れるのはこれで2回目である。私がこの留學生活で最も印象に残っていることは、中国人の人情の厚さである。大学入学後から中国語を学び始めて、今まで関わってきた中国人と言ったら、大学の先生くらいだった。実際に中国に渡航してから様々な人と交流したが、全員に共通することは、とても暖かく、人情が厚いところである。私は中国入国後、大きなスーツケースを二つ持って歩いていた。かなり重くて運ぶことが難しかった。しかし、そんな私を見て、嫌な顔をせずに二つのスーツケースを目的地まで運ぶのを手伝ってくれた。また、留學開始当初は、まだわからないことが多くあり、特に道を尋ねると、上海の人は皆わかりやすく丁寧に教えてくれ、目的地まで連れて行ってくれる人もいた。私は留學中に色々な場所に出掛けて、中国人と話したり、中国人同士が話しているのを聞いたりすることが好きだった。大学内の食堂や、ご飯屋、果物屋や、洋服屋ではよく話かけられることが多く、日本人の友人と日本語を使って話していたり、また、会話の途中で留學生であることを言うと、中国人は「日本のどこから来たの。」や、「大学で何を勉強しているの。」など私に興味を持って、友好的に話してくれ、さらに私の中国語を褒めてくれる人もいて、とても嬉しく感じた。中国に来るまでは、中国人は少し冷たいのではないかと考えていて、留學時も困ったことがあっても、声をかけるのに躊躇いがあった。しかし、実際に交流すると皆友好的で、とても暖かかった。さらに、中国人同士も街中で知らない人に頼っている光景を多く目にした。私は、東京出身であるが、東京の街ではそのような光景を見るのが少ないため、とても素敵なおことだと思ひ、うらやましく感じた。

留學中は人生で初めて親元を離れて、海外で生活し、率直に大変だと感じたことも少なくはなかったが、私が中国で過ごした8か月間は、何にも変えることができない貴重な時間を過ごした。私は中国から帰国してから今まで、中国で撮った写真を見返しては、中国で過ごした8か月間を恋しく思っている。私はまだ中国で行ったことのない場所が多く、まだ中国のすべてを知らないけれど、近い将来また中国を訪れたい。

## 漢方療法と私

獨協大学  
国際教養学部・言語文化学科・1年  
金場ノエル

中国から日本に伝来したものには、衣食住に限らず漢字や詩などの学問がある。その中でも、私にとって最も身近なものが漢方薬だ。

私は、胎児7ヶ月の時点で左肺に病気があることが分かり、出生後すぐに外科手術を施された。手術による影響と生まれつきの虚弱体質が相まって、気圧の変動によって体調を崩したり、血流の悪さから頭痛や手足の痺れを感じたりするなどの症状があった。これらの症状は、漢方薬を飲み続けていたことで中学生になるまで安定していた。しかし、中学3年生に上がる頃、左肺の調子が再度悪くなってしまい、2回目の手術を受けることになった。手術後は、左肺に繋がる神経が過敏になり、少しの動作でも左半身に痛みや痺れを感じるようになった。手術の影響は幼い頃よりも強く現れるようになり、現在も継続して症状に合った漢方薬を服用している。



漢方薬には、病気や体調不良を直接抑える効果があるわけではなく、症状の根本的原因を持続的に服用することで緩和させる効果がある。そのため、術後の緩和ケアとして処方されている。外科療法を施す西洋医学と、漢方療法を施す東洋医学の両方を患者さんに勧めることで、相乗効果が生まれるのだ。現に私も、症状の緩和や術後の疲労を軽減させるために漢方薬を服用している。

私が術後に服用していた漢方薬は、「補中益気湯」と「桂枝加朮附湯」の2種類である。手術による疲労感によって、生きる活力をなくしてしまった私に処方された「補中益気湯」という漢方薬は、手術による倦怠感や疲労感を改善する効果があった。また、「桂枝加朮附湯」は、手術による左半身の緊張やこわばり、神経痛を緩和させるために服用していた。

そして、現在でも服用を続けている「五苓散」という漢方薬には、体内の水分を循環させ、めまいや頭痛を改善する効果がある。術後半年ほどは、漢方薬の他に痛み止めの薬や、血行改善の薬なども併用していたが、漢方薬を継続して服用しているおかげで、今では漢方薬以外の薬に頼らずに生活できるようになっている。

また、この作文を書くにあたって、私が幼かった頃の話をもとに母に聞いたところ、母は私に「小建中湯」という漢方薬からできた飴を与えていたことが分かった。この漢方薬には、弱った胃腸の働きを回復させる効果がある。腸が虚弱であった私には、食物アレルギーやアトピー性皮膚炎、アレルギー性の気管支炎等の症状があった。これらの症状を少しでも緩和させるために、母は私の生活の中に漢方薬を取り入れていたようだ。その甲斐あってか、肺の病気にまつわること以外は、至って健康に成長することができた。そして驚くことに、母が丈夫な子どもを出産するために「冬虫夏草」の薬膳を食べていたことも分かった。「冬虫夏草」は、虫に寄生した植物を元に作られ、滋養強壮や免疫力の向上などの効果を持つ漢方薬のひとつだ。母は、強い子どもを産むために毛虫のスープを飲んだのだと、苦い顔をしながら話してくれた。私はどうやら、生まれる前から漢方薬にお世話になっていたようで、話を聞いた時は驚きが隠せなかった。

私は、西洋の外科療法と東洋の漢方療法、両方の医学によって、健康に成長することができた。漢方薬には、私自身の努力では整えることができない身体のバランスを改善する手助けをしてもらっている。漢方薬は、私が生まれる前から私自身に深く関わっているもので、私にとって切っても切り離せないそんな存在だ。